艶体詩　～理想的な悪魔～

工藤るう子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
艶体詩　～理想的な悪魔～

【Ｎコード】
Ｎ１９９６Ｕ

【作者名】
工藤るう子

【あらすじ】
『理想的な悪魔』の続編。（転載）

1回目（前書き）

残酷な描写があるので、苦手な方はご注意ください。

1回目

「行くぞ」

「えっ」

帰ってきた男はネクタイを引き抜きざま、オレの手を引いた。

次の瞬間、オレの鼻腔を満たしたのは、甘い花の匂いだった。

むせかえるばかりの香が、オレを眩惑する。

男の罠にかけられてからはじめての外の空気だと、気づくまでに時間がかかったのもしかたがない。

男は、人間ではない。

数十年前から人中に当然とばかりに混じるようになった異形の存在である。

神、悪魔、妖怪、怪物とも呼ばれてきたものたちだった。

今では誰が言い出したのか、彼らを言うときには、貴、鬼、奇、という漢字を用いる。

もっとも、主に使われるのは鬼と奇だけで、貴に関してはよほどでない限り使われることもない。それだけ、貴という存在が稀ということである。

その希少な貴に、なぜなのか、オレは、囲われている。

ほんの少し前まではその辺にごろごろ転がっているだけのただの高校生だったオレが、だ。言っておくが、オレは別に女っぽくもなければ、なよなよしてるわけでもないし、乙女系でもない。よっぽどがんばらなければ目立つこともない、そんなタイプだ。

そんなタイプのオレを、この男――蕭（しょう）は、悪魔のような陳腐な手法で、自分に縛りつけたんだ。

家族を人質にとられては、オレはこいつから逃げることすらできやしない。

貴の本宅というか、貴が生活を主にしているのは、オレたちが住んでるのとは別の次元って話だ。昔話の桃源郷とかみたいなもんらしい。

オレは行ったことないから、知らないけどな。

オレは、こっち側で暮らしている。あいつが仕事用に持ってるめちゃくちゃ豪勢な別宅ってやつだ。

なんでなんだか、名前からしてそうだけど、変に昔の中国っぽい造りの家で、落ち着かないんだ。

まぁ、落ち着かない原因の一つは、オレが置かれてる状況っていうのもあるんだろうけど。

かなりな間、オレはぼんやりしてたんだろう。

「どうした」

背後の高いところから声が降ってきて、オレは我に返ったんだ。

「なんでもない」

首を振ったオレの耳に、かすかに、何かが折れた音が届いた。

「そら」

無造作な声がして目の前に差し出されたのは、白と紫の星型をした小花がたわわに花ひらいた一枝だった。

オレは女じゃない――んだけどなぁ。

こいつにとっては、オレは似たようなもんか。

肩を落として受け取ったときだった。

ほんと、受け取ってすぐだ。

目の前がくらんで、頭の置くがへしゃげるような、こころもとなさを感じたんだ。

最近外に出てなかったしな。貧血だったんだろう。

その場にへたり込みそうになったオレの脇と腹に、あいつの腕が絡みつくのを感じた。

そうして、オレは意識を失くしたんだ。

「奥さま。ああ、たいへん。誰か、奥さまが……」

鈴を転がすような声だった。

「ですからお散歩などまだ無理です――と」

涼やかな男の声だった。

くらむ目を眇めて見上げると、心配そうにオレを見下ろしているまなざしがあった。

きれいに撫で上げた前髪の下に、秀でて白い額がある。

弓なりの眉、ほんの少し上がり気味の、切れ長の瞳は、黒い。

眉目秀麗という言葉が脳裏をよぎって、消えた。

――――誰だこいつ？

いぶかしむオレに、

「失礼を」

と言いざま、男はオレを掬い上げるようにして抱き上げたんだ。

いわゆるお姫さま抱っこというやつに、オレは慌てた。

「遠医師っ」

オレの口が勝手に動いて、知るはずのない男の名を呼んでいた。

オレの口から出たのは、かすれて小さな音だった。

「しばらく御辛抱なさってください」

穏やかな声に、オレは、なぜだろう、ひどく安らいだ気分になって、目を閉じていた。

鼻腔を満たす甘い花の香が、そうさせたのだろうか。

遠医師の歩調に合わせて、オレはゆらゆらと揺れる。

なぜだろう。

オレはとても泣きたくてたまらくなった。

いつまでも、こうしていたくてならなくて。

オレは遠医師の胸に、そっと顔を伏せた。

遠医師の鼓動がせわしないものに変わった気がして、オレはそっと遠医師を見上げた。

遠医師の白皙が、首まで赤く染まっている。

「遠医師？」

呼びかけたときだった。

「奥さま。旦那さまが」

鈴のような声に、

「私が運ぼう」

かぶさるのは、太く威厳のある声音だった。

とたん、オレの全身が大きく震える。

襲い掛かってくるのは、恐怖だった。

オレは、振り向くことさえできない。

遠医師にしがみつくことはかろうじて堪えていた。

そんなことをすればどうなるのか――――――本能的に予測がついていた。

「さあ」

背後の男の気配が濃密になる。

逆らうなと、頭の中に赤いランプが点滅を繰り返す。

わかっている。

けど。

からだを返させられて、痛みが走ったような気がした。

からだをちぢこめる。

「奥さま」

鈴の音が高く鳴る。

「まだ治っていないのか」

得心顔をして、黒く鋭い視線がオレを貫いた。

オレのことを人形のように扱う男の威厳に満ちたまなざしの奥に、厭な光を見て、オレの震えがいっそう小刻みなものとなる。

「ゆ、ゆるしてください」

情けないくらいに悲鳴じみた叫びは、男の目の奥の光のせいだ。

あれを見た後に、ろくなことがあったためしはない。

このからだの痛みも、このぶざまなオレの形も。

すべて、この男の逆鱗に触れたからだ。

ひらひらと金魚のように揺れる長い袖がめくれ上がり、筋肉が落ちて細く白くなってしまった腕が、剥き出しになる。

はしたないもなにもありはしない。

第一、オレは、男だから。

どんなにきらびやかな女物の衣装や飾りをまとっていても、白や赤の化粧に顔を彩られていても、たとえ足を金の刺繍をした赤い小さな沓に押し込められているとしても、オレは男なのだ。

よみがえるのは、この男にからだを変えられた時のことだ。

もうこれ以上痛みを感じたくはない。

よちよちと、他人の手を借りなければ歩くことすらおぼつかなくされた足も、高い声がでるようにといじられた喉も。腰を細くと、肋骨を数本抜き取られたことも。それが、まだ、癒えきっていないことも。すべて。

そうして、なによりも、男に抱かれる胸の痛みを――――

「今激しく動かれては、治るものも治らなくなります」

と、遠医師のとりなしに、心の乱れを感じたのは、気のせいなのか。

「――――――そうか。気をつけることにしよう」

遠医師が静かにオレを男の腕に移動させる。

男の腕に抱かれて、オレの鼓動が激しく乱れた。

オレの脇に痛みが走った。

鼓動が熱く乱れる。

脂汗を流しているオレを、男は憮然と眺めていた。

オレは、男だ。

少なくとも、まだ。

痛む箇所をかばいながら、男の脚の間にいる。

気まぐれで肋骨を何本か折られたうえに手術で取り除かれたときを思えば、何だってできるだろう。

女のようなしなやかにくびれた胴を作りたいのだと、笑った男の獣じみた顔がどれだけ恐ろしいものだったか。

けれど、それより前に、逃げたとき。連れ戻されたオレを待っていた仕置きだという処置に比べれば、それでも、あれは、ましではあったのだ。

「女の小さな足のようになれば、諦めるか」

嘯くような声に孕まれていた昏い熱が、男がいつもオレに向ける感情のほとんどすべてだった。

最初、男の言ったことがオレにはわからなかった。

オレを捕らえた男たちに両腕を左右からつかまれたまま、オレは阿呆みたいに男を見上げていたんだ。

背筋のそそけるような音を立てて、男が長剣を引き抜いたときも、殺されるのだと尻込みしていた。

男に殺されるのだと。

まだそのほうがましだったろう。

そう。

女が逃げないように、子どもの時分に小さな足を作る纏足という風習があるのを、オレだって知っている。

オレの国にはなかったことだけに、その処置の後に悪い風をもらって、女の子のうちのどれだけかは耐え切れずに死んでしまうということを聞いて、信じられないって、ぞっと震えたものだ。

違う民族でよかったとか、女の子じゃなくてよかったとか、思ったもんだ。

なのに。

まさか。

男の狙いが、オレの足なのだと知って、男が振りかぶった剣を信じられない思いでオレは見上げていた。

2回目

オレは、この国の人間が未開の地と呼ぶ国の一つで生まれた。

地平線を見晴るかす豊かな平原がオレの故郷だ。

何度目になるのか、オレが生まれる前から四十年近くつづけられていた戦に、一兵士として参加したオレは、初陣であっという間に捕虜になってしまった。

捕虜っていうのは、人間以下の扱いを受ける。

下手すりゃ家畜以下なんだ。

奴隷ってやつだ。

オレの国にも、この国の兵だったって捕虜がいたからな。お互い様なんだろうけど、けど、なっちまったら、おしまいだよな。生きて帰れるのなんかほんの一握りの幸運なやつだけだ。

不安でならなかった。

怪我ひとつなかったことが幸いなんて考えられなくて。

怯えたぶざまさで、競り市に引きずり出された。

後ろ手に縛られたまま台上に上げられて、服をひっぺがされて、全身くまなくさらされるんだ。病気持ってないか――――とか。

オレを人間なんて思っていないやつらばかりだった。

オレはそこでやけに高値がついていた。

つぎつぎとオレを見るためにやってくる男たちが、ざんばらに乱れてた髪を上げさせたり口を開けさせたり、はては、口で言うにはばかられる箇所まで覗き込まれたりして、悲鳴を上げそうになるのを堪えていたんだ。

怖くてたまらなかった。

そこでオレを買ったのが、簫の家の家令だったんだ。

何人かとまとめられて、簫家に連れてかれた。

男は、この国の将軍のひとりだった。

都にある立派な館の奴婢になったオレは、家畜小屋でほかの奴隷たちと寝起きしてた。

馬の扱いに長けてるオレたちは、馬小屋じゃなくそれ以外の家畜小屋に振り分けられてた。仲間をひとところに置いていると、脱走を計画するかもしれないからだ。

こき使うだけこき使って、少しでもへまをすると殴る蹴るの折檻を受ける。なんといっても、飯抜きが一番堪えた。

成人してはいても、オレはまだまだ育ち盛りと言われる歳なんだ。

オレもほかのやつらも、生きることだけで精一杯だった。

死んだら逃げる機会もない、一矢報いることもできない。

そうだろ？

そんな毎日だった。

何の気まぐれか将軍が奴隷の点検に来なければ、オレはそのままの境遇に甘んじてたか、逃亡を果たしたか、失敗して殺されたかのどれかだったろう。

仕事をしていたオレたちは、監督に呼ばれて、慌てて一列に並んだ。

そうして、やってきた男の顔を見て、オレは、真っ青になった。

男に見覚えがあったからだ。

その前の晩だった。

散々こき使われて、もらった飯も犬の残飯ていどでさ。

それもないよりましだから。かきこむように食らった。

歩きながらだ。

星が遠い。

見上げた夜空は、故郷で見るのとは違っていた。

今頃は、騎馬の競技会がある。

首長が見守る中で、いっせいに草原を駆ける。

一日がかりの壮絶な競技会だ。

決められたコースを夜明けから日の入りまで何周できるかを競う。

終わるころには、騎手も馬も、へとへとだ。

どれだけ強靭な馬を育てられるか、どれだけ持久力を鍛えることができているか。

優勝者は一小隊の隊長を任される。

だから、成人した男たちは死に物狂いだ。

オレも成人してすぐの競技会に出た。ビリじゃなかったけどな。

その他大勢の中の一騎だった。

馬の蹄が蹴散らす草と土の湿った匂いが懐かしかった。

思いっきり馬を駆けさせたい。

そうして、川っぷちで水浴びと愛馬の世話をやくのだ。

敵の矢に倒れたオレの愛馬。

ずっとオレが面倒を見ていたのだ。

大切な宝物だった。

けど、オレが捕虜になったあの日、あいつは、死んだのだ。

思い出したとたん、泣けてきた。

今の今まで思い出す余裕もなかったのだと思えば、自分が冷血に思えてならなかった。

「……」

あいつの名を口にする。

梢を鳴らして風が通り抜けた。

それに水の匂いを感じて、オレは、これまで足を踏み入れたことのなかった庭の奥へと踏み込んだのだった。

月に照らされて、橋のかかった池があるのが見えた。

池のふちにひざまづく。

地下水がわいているのだろう。

月に光る水面は揺らいでオレの顔は、乱れて像を結ばない。

オレは池の水を掬って顔を洗った。

暖かな夜風に水浴びをしたい欲求もある。

何日水を浴びていないだろう。

さぞかし鼻が曲がるくらいの異臭を放っているだろう。

周囲を見渡す。

誰もいないように見えた。

だから、オレは、お仕着せの襤褸を脱いだ。

冷たい水だった。

頭まで水に浸かる。

髪の毛を何度も扱いて洗う。

からだをこする。

オレは夢中だった。

だから、気づいていなかったんだ。

「なにをやっている」

低い男の声だった。

「ひっ」

オレの口をついた短い悲鳴は、条件反射だった。

情けないけど、気に食わないことをやれば鞭が飛んできたりする環境にいれば、そうなる。

怯えて竦んだウサギのようなもんだ。

ウサギはそれでも、力をためて後ろ足の蹴りを繰り出す。

けど、オレには何も残されてはいなかった。

「す、すみません」

水から上がってすぐにも逃げ出したかった。

けど。

オレは素っ裸だし。

まさか、素っ裸で逃げ出すわけにも行かない。

第一、オレの服は、男の足元に脱ぎ捨ててる襤褸だけしかないんだ。

換えなんかないんだし、なくしたりなんかしたら、どんな目にあわされるかわかりゃしない。

男の顔が月光に照らし出される。

猛禽を連想するいかめしい顔をしていた。
切れ長の目が鋭くオレを凝視している。
「池から上がれ」
命令に慣れた口調だった。
逆らいがたい威厳が、オレを打ち据える。
全裸だっていうことも頭からきれいさっぱり消えていた。
ただ命令に従わなければと、まるで飼い馴らされた犬のように、
オレはふらふらと水から出ていたんだ。
羞恥に全身が燃えるようだった。
「両手は両脇につけろ」
くちびるを噛み締めた。
目を瞑って、オレは、からだの前に重ねていた両手を脇につけた。
目を瞑っていても、痛いくらいの視線だった。
全身を余すところなく観察されている。
と、

「く……っ」

顎を持ち上げられた。

眉間に皺が寄る

不意になにか乾いたものがくちびるに触れたような気がして目を開けたオレは、ほんの目と鼻の先に男の顔があるのに慄かずにいられなかった。

顎から外れた手が首をたどり、肩を撫でる。腕から肩を執拗に撫でさすられて、オレは、途方にくれた。

「名前は」

長く思えた沈黙の後に降ってきた声は、より低く喉に絡んでいるかのようだった。

月が放つ白い光が、男の目を光らせた。

「テルム」

逆らえない。

まるで獲物を狙う獣のような底冷えのするまなざしに、オレは男に名前を明かさないではいられなかったのだ。

男が笑ったような気がした。

あの後どうやって家畜小屋に戻ったのか、オレの記憶は途切れている。

名前を言ったことで、今日なにか罰でも与えられるのではないか、戦々恐々としていたのだ。

並んだオレたちの目の前で供を従えて立っているのは。

あの男だった。

この屋敷の主人で、蕭将軍だと、男の背後に控えている男の一人が言った。

オレの全身の血が下がる。

容赦なく冷徹で冷血と噂だったからだ。

歳は四十ほどだろうか。

陽光の下で見る蕭将軍は、月光の下で見たよりも端整で、より一層その鋭さが際立つ容貌の男だった。

将軍は、青ざめているオレの腕を鷹のような容赦のなさで掴んだ。

「こい」

その短いひとことで、オレは、思いも寄らない境遇に堕とされたのだ。

3回目

風呂に突っ込まれて、全身赤剥けになるくらいにこすりあげられた。

そうして、オレは、待ち構えていた蕭将軍の前に連れて行かれた。

この国の金持ちのやつらは、何人もの妻や妾を持つらしい。それが当然と認められているんだ。

けど、妻も妾も、当然女だ。

男の妾を持つものなんか、いないに決まってる。

元々が一人しかいなかったという妻が死んでからは誰も相手にしたかった将軍が、なにをとち狂ってオレをそういう対象にしたのか。

将軍は自室にいた。

オレは、椅子に腰を下ろした将軍の前で突っ立ってた。

不安でならなかったんだ。

思いも寄らないこと尽くしで、オレの頭の中は、真っ白だった。

昨夜のことを罰されるのか。

それだけが、かろうじて頭の片隅にあることだった。

けど。

その場でされたことは、オレの不安を凌駕することだった。

なぜなら、それまでのオレが知らないことだったからだ。

平原暮らしをしてたオレにとって、男女間のことはごく自然なことだった。

知識としては羊や馬から学ぶ。だから、当然、行為も子供を作るためだけの即物的なものになる。

だから、あんな羞恥や屈辱を味わうものは、想像したこともなかった。

しかも、男と女じゃないんだ。

ありえないと思った。

できるわけがないと。

なのに、それは最後までいったんだ。

将軍は、着衣の一枚も脱ぐことなく、オレを苛んだ。

その日から、オレは男の唯一の夫人という立場に押し込まれた。
男ということを隠すためなのか、女物の服を着せられ、化粧をされて、西夫人と呼ばれるようになった。
食べ物も寝床も、最上級のものだ。けど、男のオレにとって、この待遇は、奴隷でいる以上の屈辱だった。
将軍は、二日と空けずにオレのところに来た。
オレにとって辛くてならないことは、男が来ることだったから、毎日が、苦しかった。
苦しくてならなくて。
奴隷の身には甘んじていたオレなのに、これは耐えられなかった。
だから、逃げたんだ。
笑うしかないようなひらひらとからみつく女物の着衣の裳裾を破りとって、将軍の広い屋敷から脱出を図った。
けど。
オレの体力は底をつきかけていたらしい。
豪華な食事も、食べられなければ意味がない。
やわらかな寝床も、安眠できなければ、意味がない。

気力を掻き集めて逃げたって、すぐに捕まるのもしかたのないことだったろう。

引き据えられたオレは、オレを左右から捕らえている男たちとは別の男たちに逃亡で汚れ傷ついた足を押さえつけられた。

オレはただ信じられない思いで、将軍の振りかぶった剣の描く軌跡を凝視していた。

血がしぶき、衝撃と後から襲ってきた痛みに、オレの意識は闇に落ちた。

底をつきかけていたはずの体力で、よくオレは生きのびれたものだ。

遠医師が誰に向かって言うでもなく一人語ちていたのを、オレは熱と痛みに苛まれながら聞いていた。

さすが騎馬民族というのは我々とは違って丈夫なのですね。

どこか憐れむような響きだった。

金銀真珠で飾り立てられた赤い沓。

赤ん坊が履くようなそれを、何足作られただろう。

ヨチヨチと、次女の手を借りなければ、オレは歩くことすらままならない。

逃げる意地なんか挫かれた。

それどころか。

生きる気力もありはしない。

ぼんやりと椅子に腰掛けて、庭を眺めるだけの毎日だった。

傍から見れば優雅な生活なんだろう。

けど、

「まったく上達しないな。お前は」

オレの顔をそこから遠ざけて、男が無表情のまま言う。

心臓が悲鳴をあげるのは、ここから放りだされたとたん、オレは野垂れ死ぬに違いないからだ。

オレの心は半分以上生を拒んでいるというのに、からだは生にすがりつく。

野垂れ死にたくない――――と。

「しばらく間を空けるとこうか」

オレを見下ろす黒い瞳には、ただ、オレを震え上がらせる色が宿るばかりだった。

将軍がオレを見放すのはかまわない。

けれど、ここから放り出されてオレが生きてゆくすべは、物乞いか、考えたくはないものくらいしかないのだった。

うつむいたオレの顎を指のひとつで持ち上げて、

「おまえに技巧を望むのが間違いだな」

酷薄そうな口端をもたげて嘲う。

もう一度顔を伏せようとしたものの、遅きに過ぎた。

深く貪るように、噛みついてきた。

ただ一点から全身へと走り抜けるのは、覚え込まされた欲だ。それが、男の技巧ひとつで身体を内側から炙るのだ。

しかし、そうしておきながら。

くちびるへのくちづけひとつで煽るだけオレを煽っておいて、将軍は、オレを突き放し、

「罰だ」

低い笑い声とともに、将軍はオレの部屋を後にしたのだ。

下手だから罰を受けたのだろうか。

よくわからないまま、その後のオレは、からだに点された熱と戦わなければならなかった。

どこまでも広がる草原を夢に見る。

つやめく馬体にまたがって、草いきれ満ちる風になる。

黒いたてがみが風になびいてオレの顔にかかる。

それすらもが心地よくて、オレは腹の底から笑う。

愛馬も楽しそうにいななく。

心ゆくまで疾駆する。

そんな夢を見た朝は、部屋にいたくなかった。

いくら敷地が広くても、地平線が見えるわけじゃない。花も緑も、ひとの手が加えられたものばかりだ。

それでも。

梢を鳴らし花を揺らす、風かおる場所にいたかった。

風を感じていたい。

ほんとうならひとりぎりで。

できることならば、いまはない愛馬とともに。

「陽射しが強くなってまいりましたよ」

鈴を振る声が言う。

こんな声を将軍は望んだのだろうか。

オレの今の声は、いじられる前よりは細く高くなりはしたものの、こんなに涼やかな声じゃない。将軍の希望になどそっていないに違いないのだ。

情けないくらいに小さな声しか出せなくなっている。

焦ると出ない時すらある。

将軍の好みは、しなしなとはかない女性に違いない。

それなら、そんな女性を探せばいい。

いなくても、最悪、オレにやったみたいに、手を加えればいいと思うのだ。

そんなこと、将軍が躊躇するはずがない。

重なる手術のせいで、オレは、肉体的にも精神的にも、限界だった。

将軍はオレを好きなように変えてゆく。

肋骨を何対か抜くと告げられた時、オレは気を失った。

いっそのこと一思いに殺されたほうがましだと思った。

恥もなにもない。

どんなことを命じられてもこれからは逆らわないから――と、こみ上げてくる涙を流しながら毎日掻き口説いた。

否も諾も将軍の口から聞かされることはなく、無情に時が流れた。

毎日のように来てはオレの体調を診る遠医師も何も言わなかった。

施術当日、オレが男の言葉に従うのは当然のことだと、将軍は鼻で笑ったのだ。

主人の命令には異を唱えることこそが罪悪なのだと、諭すような口調だった。

穏やかそうな声で淡々と言いながらも、将軍のまなざしは、炭がいこったような光を帯びていた。

喉の手術の時にも使われた、花からとるという薬を焚くむせるような匂いにオレの意識は遠くなる。

意識が途切れるまで、将軍の黒い瞳は逸らされることなくオレを凝視しつづけていた。

4回目

涙も涸れたと思っていた。

オレは西夫人なんて呼ばれていても、将軍が快楽を貪るための道具に過ぎない。

具合が悪ければ棄てるのが当然なのかもしれない。

頼むからひとりで散歩させてくれ――って、侍女を拝み倒したオレはその日、よちよちと杖を突きながら庭を歩いていた。

将軍が朝から不在だということもあり、屋敷の雰囲気はいつもよりものんびりとしたものだった。

緑色の薄い葉が玉のように鮮やかな庭でぼんやりとしていた。

丸く刳られた出入り口の向こうは、将軍の居住区になる。

その塀に背もたれていた。

しゃがみこみたいところだけど、足の先半分くらいを断たれて整形されてしまったオレにとって、その動作は辛いんだ。どうしても

膝から下を地面にぺったりとつけないとならなくなる。

足も杖を抱える脇の下も痛かった。

調子に乗って歩いたからな。

風が通り抜けるたび、庭の色んな木の葉が揺れて音をたてる。

それが、草原を思い出させるんだ。

草の揺れる音。

どこまでも続く緑の大地を、風が駆け抜けてゆく。

そこに寝っころがって空を見上げると、青い空に白い雲がながれてゆくのが見える。

遮るものもない、まぶしいくらいの空の色だ。

胸いっぱいに、草の匂いを吸い込んで、吐き出す。

そうして、目を瞑るんだ。

馬が草を食む音や、小さな虫のたてる音。

あれは、何よりも気持ちのいい時間だ。

ここには、ない。

現実に立ち返ると、不様な自分のありさまに、立ち竦んで動けな

い。

一歩踏み出すその方向すらわからないんだ。

どうすればいいんだろう。

背中を岩壁に押し当てて、細い道の下は、断崖絶壁で、何かの拍子で足を滑らせることすら簡単に出来るに違いない。

奇跡でも起きて、誰かが綱を投げてくれでもしないかぎり、オレは、ここで怯え続けるんだろうか。

女たちのひそめた声が塀の向こうから聞こえてきたのは、オレが涙を堪えようと空を仰いだときだった。

長いわね。

旦那さまも、いつになくご執心。

奴隷あがりで、男なのにね。

これまでだと、飽きられれば捨てていらしたのに。

奥さまが身罷られてからというもの、情け容赦なくおなりでしたのに。

少しでも媚びるようになったら、部下に下げるか、追い出すか。

お手打ちというのもありましたよ。

ああ。

あれは、旦那さまを裏切って、他の男に気のあるそぶりを向けたからでしょう。

妓女上がりでしたから。

あれからすっぱり、旦那さまも女性を侍らすことをおやめになられていらしたのに。

いつの間にやら、御夫人たちもひとりもいなくなられて。

すっかりお屋敷も静かになって、寂しいって思っていたら。

今度は、男。

奴隷。

しかも、異人。よりによって、もとは敵の兵。

でも、今は、西夫人。口を慎まなければね。

確かに、整った顔はしておいでだけれど。

あんなにまでしてお傍に置かれたいほどなのかしら。

なんにせよ、捨てられないだけお幸せですよ。

それを最後に塀の向こう側の声は、静まり返った。

汗が滴り落ちる。

目の前が、くらくらと歪んだ。

どこでもいいから腰を下ろしたかった。

このままでは、頽ることすらできないで、倒れ伏してしまうだろう。

石畳の上でそれは避けたいことだった。

だから、オレは、杖を使った。

やっきになって、塀から遠ざかろうとした。

遅々として進まない足に苛立ちが募る。

しだいに限界が近づいてくる。

空気を求めて喘ぐように口を開けた。

滴る汗が、眇めるように細めた目に染みる。

生理的な涙がにじみ、汗に混じった。

「あぶないっ」

耳を打つ男の声に汗が冷たくなる。全身を温めていた血流が、瞬時にして引いてゆく。

将軍の帰りが遅いことは知っていた。それでも、別に逃げるつもりなどない。

ただ独りになりたかっただけなのだ。

侍女の目も声もなく、ひとりぎりに。

身を硬くして目を瞑らずにいられなかった。

「大丈夫ですか」

心配そうな声に目を開けた。

「遠医師……？」

まだ薄ら昏い視界の中に、彼の顔があた。

二十代半ばほどに見える若い医師が、

「失礼を」

とつぶやいて、傾いだままだったオレの膝裏を掬い上げるようにして抱きかかえたのだ。

「え……」

視界と同じくひっくり返ったオレのからだが、激しい鼓動に震えあがる。

将軍を別にして、遠医師はオレのからだのすべてを知っている。オレを囲う将軍に命じられてのこととはいえ、元々軍医の家系の出

だというこの男が、オレのからだを変えていったからだ。

穏やかでやさしい雰囲気とは別の、冷徹とも見える顔をオレもまた知っている。

そう思えば、オレが怯えたとしても不思議ではないだろう。

オレの感情を悟ったのか。

遠医師の眉間がかすかに暗く翳ったような気がして、オレは目をしばたかせた。

べたべたと白く塗られて目や口頬を彩られているオレの顔は、見れたものじゃないだろう。けど、このときオレはそれを忘れて、遠医師を凝視してしまった。

「怖がらないでください」

すまなさそうな困惑したような、それでいて喉に絡んだような声で、遠医師がささやいた。

「もうあなたを傷つけることはありませんから」

「……気休めはいいよ」

口角が震える。

「———夫人」

「将軍に仕える者として、私はこれから先なにもできはしません。

けれど、私もあなたをこれ以上苦しめたくはないのです」

今更と思った。しかし、オレを見下ろすまなざしの真摯さに、オレは心の奥深いところが捩れるような錯覚に襲われた。

奴隷に落とされてから初めてだった。

冷たく硬い声や態度にさらされていたオレには、オレを玩具だと貶めつづける将軍の指先ひとつ、言葉まなざしのひとつに、動揺しないでいられなかったんだ。

涙がこぼれた。

そのときから、オレの心は遠医師に惹かれていった。

駄目だと、自分を戒めれば戒めるたびに、心が遠医師に向かうのが感じられて、オレは苦しんだ。

こんな身になってはいても、オレは紛うことなく男なのだから。

たとえ将軍に日々抱かれているからとはいえ、心まで男に抱かれることを望んではいない。

――――望んではいない。

慕わしいという思いと肉欲とは、必ずしも一致しないはずだ。これはたぶん、折れそうな心が何かにすがりつきたいと、心の拠り所を求めたからなんだろう。

第一。

遠医師が望むわけもない。

気持ち悪いとでも思われたりしたら、悲しい。

それに、もしも将軍に知られたりしたら。

自分が望んだ境遇でなくても、一応オレは夫人などと呼ばれている。もしも、そのオレが遠医師に惹かれているなどと知られでもしたら。

『お手打ちというのもありましたよ』

『あれは、旦那さまを裏切って、他の男に気のあるそぶりを向けたからでしょう』

女たちの噂話がよみがえる。

オレは仕方ない。

けど、オレのせいで遠医師が酷い目にあったりしたら。オレは、悔やんでも悔やみきれないに違いないのだ。

オレには、態度を変えるつもりなんか、これっぽっちもありはしなかったんだ。

それからしばらくの間は何事もなかった。

オレは相変わらずだったけどな。

将軍がなにか気づいているみたいには思えなかった。

それよりも、きな臭い噂が広まっているみたいだった。

オレのとこまで、戦が始まるだろうなんてざわついた空気が伝わってくるんだ。

「もう……」

快感に喉がつまった。触れてくる指の一本さえもを苦痛に感じるほどに高められて、全身が小刻みに震え揺れる。

終わってほしい。

どこもかしこも熱をはらんで、滴る汗すらも過ぎる快感に繋がった。

執拗な愛撫と律動。

埋め込まれている箇所は引き攣れて、痛みが快感に結びつく。

切なくて悲しくて、どうしようもなかった。

激しく揺さぶられて、声にならない悲鳴をオレはあげた。

戦への期待からか、いつもよりも猛り激しく、将軍はオレを苛んだのだった。

一応はオレも兵士だったわけだけど、特に戦が好きってわけじゃない。

オレは徴集されるまでは平凡な羊飼いだったからだ。それまでは馬に乗って広い草原に広がった羊を集めたり放したりして暮らしていた。

家族はいなかった。親父はやっぱり徴集されて、以来行方不明だ。オレみたくどっかで奴隷として暮らしてるのか、それとも戦死したかのどっちかだろう。おふくろは実を言うとオレとの血のつながりはない。ふたり目だったし、この国の人間だった。奴隷としてつれてこられて、親父に惚れられて半ば略奪されるようにして親父の妻になったらしい。あまり気にしたことはなかったけど、だから少しほかの女に比べたら心が弱かったのかもしれない。生まれたばかりの妹をすぐに亡くすと、親父が徴集されたことで、心を壊してしまった。妹が生まれるときにからだを壊していたっていうのもあるんだろうけど、その冬が深くなったとき、あっけなく死んじまった。オレが十四の冬だ。以来三年、オレはずっとひとりきりだったんだ。

この国を打ち負かすことは、オレの国の悲願だった。その理由は、この国に蹂躙されたからだ。

国境を越えてやってきたこの国の兵たちがオレの国になにをした

か。

国土を荒らし、まるで異民族のオレたちは人間じゃないとばかりに狩のように殺し犯し、女子供を奴隷にして連れて行った。

最初は防衛一方だったものが、いつしか、反撃侵略略奪と変化するのは自然なことなのかもしれない。だからって、それが良いことだとはいわないけどな。それでオレたちだってしんどい目を見たわけだしさ。けど、男はどうしても戦となれば血に猛る。勲をあげようと、無茶をする。いつもは嫌なのに、戦の最中は、血を見ると、血の匂いをかぐと、なぜか全身の血が沸き立つんだ。

命令が下ったんだろう。

ある日、ついに、将軍は出陣していったんだ。

後に残ったオレはといえば、心もからだもずたずたのへろへろだった。

戦の予感に逸った将軍は、いつもよりも酷い行為をオレに強いたんだ。

縛りつけたり鞭を使ったり、気味の悪い道具で散々もてあそばれた。

オレの意思も懇願もことごとく無視されて、ただ将軍の快感に奉仕する抱き人形のようにして扱われたんだ。

そうして朝、投げ捨てられた襤褸のようなオレを見下ろして、

「行ってくる」

そう言って出て行った。

遠医師も当然出陣したものだと思っていた。なぜなら、あの朝オレの手当てをしたのは、遠医師ではなかったからだ。見知らぬ顔色の悪い男が、無表情にオレを治療して出て行った。最初から最期まで無言のままでだ。

もしも出陣の日を知っていたなら、その日までに遠医師が治療にやってくるようなら、オレはひとこと「ご無事で」と告げただろう。けれど、そんな機会は、なかった。オレは十日近くの間、一度も遠医師の顔を見なかったからだ。

どうしたんだろうと思った。

もちろん、オレと遠医師との間には、なにもありはしない。あるのはオレの一方的な感情だけだ。行動に移すつもりなど微塵もありはしない。それでも、将軍が許しはしないだろう予感があった。

不安だったけど、だからって、誰に聞けただろう。

下手に聞いて藪から蛇を出したりしたら、目も当てられない。

出陣前のあわただしさで、ただ来れないだけという可能性だってあるのだ。

オレはただ沈黙を守ってた。

オレが黙りこくってるのは、いつものことだったから、それなら誰も疑惑を抱くはずもない。

だから彼が来たときにはびっくりした。

そのときオレはぼんやりしていた。

将軍がいない毎日は、オレにはすることはなにもない。

いいご身分とかって思われてるんだろうなぁとか思いはするけど、下手なことをして機嫌を損ねでもしたらなにをされるかわからない怖さが、オレを無気力にしていたんだ。

椅子に腰をかけたままで格子窓から庭を眺めてた。

「西夫人」

ひそやかな声だった。

それでいて、思いつめたような硬さが感じられた。

驚きが過ぎてしまうと、無事な姿を見たうれしさよりも、不安が強くなったのはそのせいだ。

オレは阿呆みたいに、遠医師を見上げてた。

そんなオレになにを感じたのか、遠医師がオレを見下ろしてくる。
将軍と同じ黒い瞳なのに、どうしてこんなに違って見えるんだろう。
どうしてそこに慕わしさを見出してしまうんだろう。
遠医師が両手をオレに差し出した。
「？」
馬鹿みたいにオレはそれを見ていた。
「西夫人……」
もう一度名前を呼ばれて、オレは、顔を上げた。
ためらい、とまどい、怖気、いろんなものが混じった表情で、遠医師がオレを見下ろしている。
「私の手を、取ってくださいませんか」
密やかな声に、しかし、オレは撃たれたような心地がした。
喉に声が絡んでいた。
何か言いたいのに、押し出すことが出来ない。
「このままでは、あなたはまた、からだを変えられてしまいます」

耳から脳を直接何かが貫いたような衝撃だった。

また？

なぜ？

まだ、この上、どこを変えられると……。

まさか。

まだ、オレが男だと必死でしがみついていられるのは……。

そうだ、男である証をまだオレは持っている。

そんなことまで。

そこまで奪われてしまうというのか。

喉の奥から、笛のような高い音がほとばしる。

オレは首を横に振っていた。

「う……そだ」

見上げる先では、遠医師が痛ましそうにオレを見下ろしている。

そうして、オレは、オレの予感が遠からず現実になるだろうことを、思い知る。

「いやだ」

血の気が引く。

これ以上奪われるというのか。

「たすけて」

怖い。

怖くてたまらない。

またオレのからだを、オレの意思など無視して変えるというのか。

そのときにオレに襲い掛かるだろう痛みまでも予測して、オレは、自分のからだがどうしようもなく重くなってゆくのを感じていた。

息が浅く、脂汗が流れ落ちる。

間接のあちらこちらが重鈍い痛みをはらんだ。

頭が目が回る。

不思議なほど遠くで遠医師がオレを呼んだような気がした。

犬のような息をつきながら、オレは、遠医師が差し出してくれた碗から水を飲んだ。

かろうじて、気を失いきることは避けたらしい。それでも、今にも吐きそうで、頭も痛んだ。

「私はもう、西夫人を傷つけたくないのです」

からだを変える手伝いをもうしたくはない。そう将軍に申し出ました。愚かにも馬鹿正直に。

今、私はあなたの主治医などではありません。職を解かれてしまいました。過日、あなたの手当てをした者がいたでしょう。あの男が、次のあなたの施術の担当者です。

「もう、決まったことなの……か」

ぞっとした。

遠医師がオレの主治医を解かれていたことも衝撃だったけど、あの顔色の悪い男がこれから先オレのからだを変えてゆくのだと思うと、たまらなかった。

「とめることは、出来ませんでした」

眉間に皺を寄せて、遠医師が目を閉じる。頭を下げる遠医師に、

「あんたのせいじゃないし……」

ほかになにが言えただろう。

「いなくなっちゃうんだな」

寂しい。

「あんたが上手いのわかってるし、だから、まだ、安心だったのに

な」

こんなことが言いたいわけじゃない。

でも。

だからって。

言えないっ。

なのに。

「手を取って、ほんとうに、いいのか」

そんなことをオレは口走っていたんだ。

オレは、自分が信じられなかった。

けど、オレよりも、遠医師のほうが、信じられなかったんだろう。

弾かれたように瞼を開いて、オレを凝視したんだ。

オレは、遠医師の手を握ろうと、手を伸ばす。

手が、からだが、無様なくらいに震える。

なにをしているのか、わかっていた。

これは、明らかに、将軍に対する裏切りだ。

わかっていて、止めることができなかった。

「オレがあんたの手を取れば、あんたもオレも、裏切り者だ。多分、殺されるだろう」

それでも、かまわないのか。

遠医師の黒い瞳が、不意にやわらかい微笑をやどした。

「あなたを愛したときから、承知の上です」

オレの手は、遠医師の手に触れる寸前に動きを止めた。

思いもよらないことだったからだ。

「遠医師？」

「愛しています」

ご迷惑ですか。

オレは、首を横に振った。

遠医師の手を握り、

「オレもだ」

それだけを、言った。

全身がしびれるような幸せを感じていた。

紙一重で地獄が口を開いているのを痛いくらいに知っていながら、それでも、オレは、遠医師がオレを抱き寄せるのをうっとりとして受けいれていたんだ。

そのままオレは目を閉じた。

互いの呼気を感じるまでに顔が近づいた。

触れるか触れないか。

遠医師の乾いたくちびるがオレのくちびるに重なろうとしたとき、オレは、なにか、聞いたことがある音を聞いたと思った。

そうして、オレは、オレのくちびるに冷たいものが触れたのを感じた。

オレと遠医師の間に、剣があった。

オレと遠医師のどちらも傷つけることなく、それは、存在したのだ。

いつ帰ってきたのか。

そんな気振りなど微塵もなかったのに。

将軍が、そこには立っていた。

オレと遠医師とを見るまなざしは、奇妙なくらいに人間味がなく、オレは、将軍の怒りをまざまざと感じていた。

「いい度胸だ」

罅割れたような声が、オレの耳を射抜く。

オレは、紙一重の紙が破られたのを感じていた。

最終回

「連れて行け」

「遠医師っ」

必死でオレは遠医師に手を伸ばした。

その手を、片手に剣を持ったままで将軍が掴んだ。

途端喉の奥からほとばしりでた悲鳴に、

「おまえはっ」

将軍の眉間に深い皺が刻まれた。

遠医師は後ろ手に両手を捻りあげられて、どこかにつれて行かれようとしている。

遠医師の黒い瞳が、彼がオレの視界から消えるまで、オレを見ていた。ことばなくまなざしに秘められているものは、絶望ではあっても、オレに対する恨みではなかった。それどころかまだ、オレを気遣うかのようだった。何も返してやれなかったオレを、彼はただ、オレのこれからを心配しているのだ。

遠医師のくちびるが、言葉を紡ぐ。

ただひとこと。

愛しています――と。

オレに優しくしてくれたひとだ。オレのことを愛しているといってくれた。行き止まりなのを知っていながら、一緒に逃げようと手を差し伸べてくれた。

オレも――――。

答えようとして、かなわなかった。

遠医師を追っていた首を、将軍が無理やり自分のほうへと向かせたのだ。

涙がながれた。

震える喉が、声をへんな風に揺らがせるだろう。

それでも、

「こ、殺さないでっ。お、おねがいです。遠医師をっ」

やっとのことでそれだけを口にしたとき、オレは、自分が間違いを犯したことに気づいた。

「そうか。自分のことよりも、遠のことが気がかりなのか」

力をなくしたようなその独白が、オレの耳に奇妙なほど大きく響いた。

そんな気がした。

シャラリ――と、金属が触れ合わされるような音がして、右手の剣が柄の中に戻される。

右手が、オレの首を撫であげた。

「いやだ」

顔を上向かされて、噛み付くようなくちびるが落ちてきた。

深く貪るばかりの激しさに、将軍の怒りと苛立ちとが感じられた。

違う。

こんなくちづけを望んだのじゃない。

オレが望んだのは、遠医師の、おそらくはやさしいに違いないくちづけだった。

そのくちびるの感触を知ることもなく、ただ、彼の想いとその手の震えをだけしか、オレは知らないままだ。

やがて逸れたくちびるが、オレの耳の付け根に移った。

首を振る。

振りつづけるオレに、

「遠の手足を断って胴を壺に活けてやろうか」

「どうしてっ。オレを殺せばすむことじゃないか」

「このあたりにその壺を据え置いて、私に抱かれるおまえを死ぬまで見せつづけてやろうか」

喉の奥で笑いながらの残酷なことばに、オレの血が下がる。

将軍の肩に手で縋りつくようにしながら、床の上に膝をつく。

「オレを殺せよ。殺したらいいじゃないかっ。だから、それだけは、遠医師を罰するのは」

最後まで将軍は言わさなかった。

オレの頬で、鋭い平手が爆ぜたんだ。

後ろざまに倒れたオレを、将軍は髪を鷲掴んで引きずった。

脳震盪を起こして青暗い視界が、ぼやける。

自分の体が自分のものではないような、変な感覚があった。

痛みは痛みとしてあるのに、どこか他人事のような感じで、オレはただ将軍のなすがままだった。

そのままオレは、寝床に引きずり上げられた。

ぼんやりとただ天井を見上げているだけのオレの着衣をはだけてゆく。

なぜなんだろう。

涙が止まらない。

裏切った奴隷なんか、殺してしまえばいいじゃないか。

これまでだってそうしてきたんだろう。

いつかの女たちの会話が頭を過ぎる。

遠医師を殺さないで。

遠医師だけは殺さないで。

遠医師だけを殺さないで。

遠医師を殺すなら、オレも、殺せ。

遠医師の手足を断つなら、オレのを断てばいい。

これまでだって、散々オレの体を変えてきたんだ。

もう、どうだっていい。

好きにすればいいんだ。

オレを女に変えてしまいたいというなら、変えればいい。

どうせ、オレなんか、ただ息をしているというだけの人形なんだから。

将軍がオレを貫く。

その衝撃に、全身が震える。

痛みも、見も世もない快感も、どこか遠いことのように感じられた。

ただ、乱暴に揺さぶられて、しつこいと、わずらわしいと思うだけだった。

ただ、涙がながれるだけだった。

不意に将軍の動きが止んだ。

オレの体の中で、何かがはじけた。

オレを貫いたままで、将軍がオレを抱き上げる。

自分も起き上がり、その膝の上にオレを抱き上げた。

背後から抱きかかえられたままのオレの耳元で、

「遠の名を呼ぶのは止めろ」

そんなことをいう。

「私がこんなにもお前のことを愛しているというのになぜ、おまえは少しも私のことを見ようとしないのだ」

今更そんなことをいわれても、そんなことオレは知らない。

「私を見ろ」

体勢を変えられた。

肩をつかんで揺さぶられた。

ただ、オレは、将軍が言うように、遠医師を呼びつづけているらしかった。

遠医師。

ごめんなさい。

ありがとう。

愛していると言ってくれて、ありがとう。

誰かを愛せて嬉しかったんだ。ほんとうに。

あなたを助けられなくて、ごめんなさい。

あなたを殺してしまうオレを許してくれとは言えないけど、それでも、ごめん。

「テルム」

愛しています。

遠医師。

刹那、

「ぐっ」

喉を絞められる苦しさに、オレは、手を泳がせた。

目を見開いた。

鋭い黒いまなざしが、オレを見ている。

いこった炭のような赤い光が、瞳の奥でちろちろと揺れている。

「いいだろう」

低い声だった。

そこまでおまえが私を無視するというのなら、望みどおりおまえを殺してやろう。

オレは笑ったに違いない。

「ただし———殺すのはおまえだけだ。死んだ後も、おまえに自由はないものと思い知るがいい」

将軍の最後の一言は気になったけど、遠医師が殺されないのならそれでいいと、オレは思ったんだ。

オレは、笑いながら死ぬことができた。

喉を絞められるのは苦しかったけど、遠医師が生きているのなら
それでいいと、オレはそれだけを強く考えた。

そうして、オレは死んだ――――――はずだった。

なのに、どうしてオレは、ここにこうしているんだろう。

オレが見ているのは、オレだった。

オレだったものが、ぐつぐつと滾る鍋の中で煮溶かされてゆく。

大きな鍋の横に、青黒い顔をした将軍が佇んでいる。

その手に玩んでいるものが、オレの髪だと、オレにはわかった。

髪の束はなにかの呪いを施してあるらしい。

それが、オレをここに引き止めているのだ。

どうせなら、遠医師が無事かどうか確かめたかった。

死んだ後も自由はないと思い知れと、将軍が言ったとおり、オレ

には自由はなかった。

「テルム」

将軍のくちびるがオレの名前を口ずさむ。

「愛している」

生きていたときに一度も聞いたことがない切ない声で、手の中のオレの髪にくちづける。

そのさまだけを見ていると、憐憫を覚えそうな光景だった。

可哀想にと。

けれど、オレは、オレのくちびるが嗤いをかたどってゆくのを止めることができなかった。

苦しめばいい。

苦しんで苦しんで、狂ってしまえばいい。

オレも苦しんだんだ。

遠医師だって。

だから、オレは、将軍を許さない。

死んだ後までオレを縛る将軍を、絶対に許してなんかやらない。

オレは、煮溶けたオレの骸が大鍋から取り出され、残った骨が砕かれてゆくのを将軍の傍らから見ていた。

足の甲の半分近くと、左右の肋骨の幾本かが足りないオレの骨が砕かれる。

砕かれて細かい粉状になったオレの骨が土に混ぜられて、最終的に壺がひとつ作られるのを、オレはただ見ていたんだ。

白い壺になったオレの骨は将軍の寝室に置かれた。

将軍がオレであった壺を撫でさすり語りかける。

将軍は狂ったのに違いないと、気味悪がって侍女たちがひとりまたひとりと屋敷を出てゆこうとするのを、家礼が必死になって止めている。

そんな将軍の傍らに立ちつづけて、オレのくちびるはいつしか嗤いを失っていた。

口角がしだいに下がってゆく。

なぜ――――と。

オレをその手で殺しておきながらそんなになるというのなら、なぜ。

生きていたあいだにひとことでいい、優しい言葉のひとつでもかけてくれていたのなら。

心が弱っていたオレのこと。

容易く、将軍に惹かれてしまったことだろう。

あんなにも酷いことをされていても、それでも、将軍に縋ってしまっただろう。

愛していると泣いたかもしれない。

それほどまでに、オレの心は弱りきっていたというのに。

――――――蕭将軍。

聞こえない声で、将軍に語りかけてみる。

酒を呷るようにして飲む将軍の傍らで、しずかに、喋ってみるのだった。

戦装束の将軍が、オレであった壺を砕いた。

大き目の欠片をひとつ取り上げると、オレの髪とともに皮袋に収め首からつるした。

出陣した将軍が、再びこの屋敷に戻ることはなかった。

将軍は、この国の最後を見ることなく戦に散った。

日々の深酒がからだを弱らせていたのだろう。

将軍の最後はあっけないほどのものだった。

そうして、将軍の首級があげられた時、ようやくオレは将軍から自由になれたのだ。

呪いの施された髪は戦火に溶け消え、壺の欠片は戦靴に砕かれた。

髪が火に焼かれた時施されていた呪いも消え、オレもまた、この世から消え去ることができたのだ。

「大丈夫か」

耳に馴染んだ声なのに、これまで聞いたことのないトーンだなぁと、暢気に思った。

目を開けると、まだ少し薄らぐらい視界いっぱいに、男の顔があった。

前髪を掻きあげられる。

首を少し左右に振って、何度か目をしばたかせてみる。

――――似ている。

夢の中の男に。

そうしてもうひとり、西夫人と呼ばれた少年が自分に似ていたと、思い出す。

「まさか……」

声がひずんでいるのが自分でもわかるくらいだった。

「寝ぼけているのか」

幾何学模様の螺鈿細工の天井が眩暈を誘う。

オレはもういちど首を左右に振った。

「ここは？」

「結界の中だ」

無造作に言われて、オレは周囲を見渡した。

円形の出入り口の外には、長い夢の前に手折られた小さな星のような花がたくさん咲いている。

うっすらと藤色がかったような空の色は、確かに、これまでオレがいたところでは見たことがないものだ。

上半身をベッドの上に起こして、オレは、蕭の顔を正面から見た。

似ていた。

目の色こそ違うものの、端整な顔、鋭い目つき、黒い髪、夢の中の将軍そっくりだった。

オレは、震えながら蕭の頬に手を伸ばした。

「蕭———将軍？」

怖いと思った。

それでも、確かめずにはいられなかった。

蕭がひとつゆっくりと瞬きをすると、

「かつて、そう呼ばれたこともある」

と、おだやかに肯定した。

そうして、

「懐かしいだろう、テルム。いや、西夫人」

蕭は楽しそうにそうつづけた。

最終回（後書き）

色々と突っ込みどころは満載ですが終わりです。
少しでも楽しんでくださると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1996u/

艶体詩　～理想的な悪魔～

2011年7月6日03時12分発行